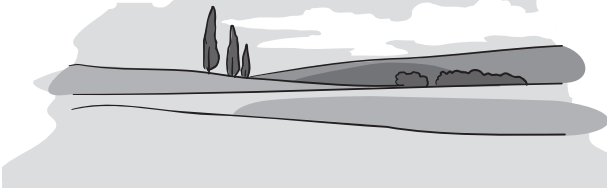
小樽市医師会新体制へ



小樽市医師会
おたるイアクリニック　　鈴　木　敏　夫

平成27年５月29日、定時総会による役員改選により、小樽市医師会は阿久津光之新会長率いる新体制となった。３期６年間活躍され勇退された津田哲哉前会長には、顧問として引き続き助言いただくこととなった。津田先生は、医師会の一般社団法人化をはじめとして、数々の諸懸案の解決に尽力された。この間、市内の状況も大きく変わり、平成25年８月の済生会小樽病院の新築移転、および併設されていた夜間急病センターの独立新築移転、平成26年12月には市立小樽病院と小樽市立脳・循環器・こころの医療センター（旧市立小樽第二病院）の合併新築移転があり、行政においては、平成27年４月の統一地方選挙における小樽市長選挙において過去28年間、自民・民主・公明・連合・商工会議所のいわゆる５者連合により推薦された候補者がほぼ自動的に当選していた構図を大差で打ち破り、42歳の新市長が誕生した。

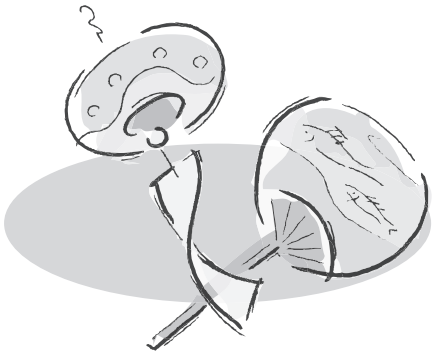
阿久津会長を支える副会長は、近藤真章先生（再任）、大庭久貴先生（新任）となる。新役員として菅田忠夫先生が理事として、前田和男先生が監事として理事会に参加されることになった。

道内の人口10万人以上の地域の中でも最高の高齢化率と急速な人口減少を抱える小樽市は、これからの北海道および日本の先行する縮図ともいえる状況となっている。平成27年５月末時点で65,667世帯、123,937人（年少人口9.3％、生産年齢人口54.21％、老年人口36.49％）の人口は、残念ながら出生数の減少（昭和40年代年間約4,000人から現在は650人以下）および市外への流出から年間２千人単位で減少しており、団塊の世代が後期高齢者になるいわゆる2025年には、人口10万人を切る可能性がある。

この状況の中、小樽市内で２ヵ所しかない分娩施設のうち、小樽協会病院が平成27年７月より当面、分娩を取り扱わないことになり、個人の開業診療所のみとなる。したがって今まで小樽市内で出産していた妊婦の約半数は、平成27年７月以降、札幌など近隣の施設にての出産を余儀なくされる。これは出生数の減少にさらに追い討ちをかけることとなりかねず、小樽市医師会でも関係諸団体と協力して事態の打開に乗り出し、「後志の周産期医療を守る署名活動」に協力して、短期間に合計５万筆を超える署名集めに成功し、署名は団体から北海道に提出された。また新市長も緊急の課題として重要視している。

地域医療構想策定ガイドラインに基づく対応については、平成27年６月23日に小樽市医師会の第１回地域医療構想委員会が開かれ、阿久津会長の指示のもと、大庭副会長が中心となり対策を検討している。６月末時点では、地域医療構想に必要なデータが公表されておらず、公表後速やかに内容を把握し検討する予定である。その後市内の病院長、有床診療所院長等を対象にワーキンググループを発足する予定としている。

小樽市医師連盟としては、平成27年７月６日に、元千葉県我孫子市長、元消費者庁長官で、現中央学院大学教授の福嶋浩彦氏を迎えて「人口減少時代の自治体経営」の緊急特別講演会を開催した。

また10月24日に小樽市で開催される北海道医師会後志ブロック大会では、特別講演に国際福祉医療大学・高橋泰教授を迎えて「人口減少社会に向かう日本の医療介護の現状と将来予測－特に後志に焦点をあてて－」を拝聴する予定である。

以上のごとく、すでに阿久津新会長体制は、いきなりフルスロットル状態で、小樽後志を取り巻く諸問題に対応している。